OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日中同形語の文体差
Author(s)	宮島, 達夫
Citation	阪大日本語研究. 1993, 5, p. 1-18
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/3629
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日中同形語の文体差

Stylistic Differences between Japanese and Chinese Homographs

宮島達夫
MIYAZIMA Tatuo

キーワード：日中同形語，文体的特徴，『岩波中国語辞典』，位相

1. 問題の所在

「日中同形語」というとき，ひろい意味では，日本で訓よみされる和語もふくまれるが，ここでは対象を漢語にかぎる。

「手車」「手下」「手紙」「手足」という中国語の単語がある。これらとおなじ漢字表記の単語が日本語の文章にでてきたとき，これらを「てぐるま」「てした」「てがみ」「てあし」と訓よみすることもできる。つまり，これらの表記でかかれる和語も，日本語のなかにはある。しかし，日本語のなかに音よみの漢語としてあるのは，「手足（しゅそく）」だけである。ここでとりあげるのは，この「手足（しゅそく）」の類の日中同形漢語だけで，日本語が和語しかない「手紙」の類はとりあげない。（なお，「同形」ということばは，もっぱら文字面に注目した表現であって，発音の面では，とうてい同形などといえない。）げんみつには，日本と中国で字体がちがうのだから，同形語であっても，それぞれべつの表記をすべきなのだが，便宜上，中国語の例についても，原則として日本語の字体で表記する。

同形語については，すでにいくつもの研究がある。そのおおくは，意味の差についてのものである。これは，意味の問題がいちばんたいせつなことからみて，とうぜんである。しかし，同形語では，また文法的な性質の

ちがいが問題になることもある。「汽車」「愛人」などでは，意味のちがいはおおきいが，日中とも同類の分野に属する単語なので，文法的性質は，ほぼおなじである。しかし，意味的にはちかいのに，文法的な性質がちがう同形語も，たくさんある。日本語の「生産」は名詞でしかなく，動詞としてつかうには「生産する」という形にすることが必要であるのにたいし，中国語の「生産」は名詞でも動詞でもありうる。また，中国語の「一致」は，名詞としての用法以外に，形容詞的・副詞的な用法ももっている。日本語の「一致」は，そのままの形では名詞としてしかつかえず，形容詞的（述語的）・副詞的な用法は「一致している，一致して」などと表現しなければならない。

ここでは，さらに，日中同形語は文体的な差をもつことがあることを指摘したい。たとえば，「学習」は中国語にも日本語にもある。そして，中国語では，これは，名詞としても動詞としても，ごくふつうの単語であって，こどもにむかって「いま，なにをべんきょうしてるの？」ときくときにも，「学習」をつかう。しかし，日本語では，こどもに「いま，なにを学習してるの？」というのは，あまり自然ではない。「学習」は，あまりにあらたまった文体の単語であって，それにふさわしい場面，ふさわしい対象（本格的な学習）でなければ，つかえない。（同様に，「なにをならってるの？」はいいが，「なにをまなんでいるの？」はおかしい。）このような文体の差は，敬意・美化の接頭辞をつけたとき，「おべんきょう」にたいして「ご学習」になり，「ごべんきょう」や「お学習」が，あまりつかわれないことにも，あらわれている。

外国語をつかいこなすには，単語の文体的特徴まで，しらなければならない。しかし，日本語をならう中国人が，同形語であるために「学習」の文体差に気づかずに，くだけた場面で「学習」をつかってしまう，という危険性も，かんがえられる。だから，日中同形語の文体差の研究は，実用的にも意味があるはずである。浅野（1981）や島本（1990）には，日中同形語ではないが，位相の誤用例があがっている。

2. 『岩波中国語辞典』の文体の規定

外国語のこまかい文体上の差をしるのは，きわめてむずかしい。しかし，さいわいなことに，中国語については，倉石武四郎『岩波中国語辞典』という研究成果がある。この辞典は，文字中心でなく単語中心の見出し語にしたこと，見出し語をローマ字表記にしたこと，北京のはなしことばを記述の中心においたこと，シソーラス「意味による索引」をつけたこと，など，いくつもの独創的な特徴がある。これらの特徴は，実用的な辞典としては，かならずしも肯定的な評価をえられないかもしれないが，大胆なこころみとして辞書史にのこるものであることは，まちがいない。

すべての単語に文体上のランクを明示したことも，この辞典のおおきな特徴である。以下の調査の基準になるので，「序説」から，関係する部分をくわしく引用しよう。

§24　中国語の語彙は，それぞれの硬度をもって使用される．たとえば，動詞 dǎ（打）はきわめて普通の硬度をもったことばで，いわば“たたく”に相当する．そのおなじ動作を，もし zòu（揍）といえば，それは，いわば“ぶつ”といったようなものであって，硬度のよわいものといえるが，通用する範囲はまだひろい．しかるに，もしこれを liāng（これにあたる漢字はない）といえば，それは俠客の社会で用いられる特殊なことばであって，いわば，“どやす”といったものになり，硬度は一層よわい．また，báitian（白天）といえば，いわば“ひるま”といったような，普通の硬度をもったことばであるが，おなじことを báizhòu（白昼）といえば，相当に文語のおもむきがあって，いわば“白昼”といったように，硬度のつよいものといえる．これを，こころみに数字によって次の11のランクに分ける．

上の5　古典のなかのことばが，たまたま耳できくことばの中に引用されて現われるもの．shǐcè（史冊），qiānqiū（千秋）など．

上の4　古典のなかのことばではあるが，耳できくことばの中に混用されているもの．zhītóu（枝頭），shìcí（飾詞）など．

上の3　学術その他の専門のことばで，一般には広く使用されていないもの．yuánzhōulǜ（円周率），wéiwùshǐguān（唯物史観）など．

上の2　文学作品などに現われることば．yìn'àn（陰暗），liàowàng（了望）など．

上の１　ラジオ・テレビ・講演などで話されることば．búdàn（不但），kāishǐ（開始）など．

0（数字を加えていないもの）　きわめて普通なことば．gěi（給），bàozhǐ(報紙）など．

下の１　ややくだけた言いかた（いわゆる北京語）〔註 1〕．kāihuǒr（開火児），fǎnjìnr（反勁児）など．

下の２　北京の下町ことば，スラングなど．lòuqiè（露怯），fānguō（翻鍋）など．

下の３　特殊な社会で使用される仲間ことば，隠語など．piàoyǒur（票友児），kǒurshàng（口児上）など．

下の４　他人にたいする悪口のことば〔註 2〕．sǐwángbapí（死王八波），chuógèr（蠢個児）など．

下の５　北京以外の方言から流入して，いちおうは北京でおこなわれていることば．sālànwū（撒爛汚），yāyāwū（呀呀唔）など．

この辞典では，いちおうこの基準によって，すべての語彙にこのランクの標識をほどこしたが，これらの区分は，本来，きわめて困難であって，いずれのランクにおくべきか判断に迷うものも少なくなく，また11ランクそのものが適当であるかどうかにも，さまざまの問題はあるが，さしあたり，これを大体のめやすとして，語彙を運用すれば，多大の便益があること勿論である．なお，語彙のなかには，いわゆる成語，たとえば kànrénxíngshì（看人行事），míngméizhèngqǔ（明媒正娶）のようなものをも採録してあるが，これらは多く文語的な表現をふくむとはいえ，一般には，耳できいても，ただちに理解できるので，一律に，きわめて普通な硬度として処置した．

〔註 1〕　0すなわち数字を加えていないものは「普通話」すなわち全国共通語であり，下の２が「北京土話」すなわち北京の土語であるのに対し，下の１はいわゆる「北京話」すなわち北京で普通の会話に用いられるものをいう．

〔註 2〕　文字どおり悪口とはいえないものでも，他人の前で言って相当な悪感情をおこすおそれのあるものは，便宜上このランクに入れてある．

一般に，辞典でランクがしめされているばあいでも，その基準を明示したものは，あまり多くない。その意味でも，『岩波中国語辞典』の態度は，特筆しておく価値がある。基準が明示してなくて，見出し語にただレッテルがはりつけられているだけでは，それが妥当かどうかを検討することもできず，研究の進歩につながらない。

ここで「ランク」とよんでいるものは，文体的水準といってもよいであ

ろう。ただし，ここでの基準のうち，「ランク（硬度）」そのものを直接規定したのは，＜0＞と＜下の1＞だけで，ほかは，規定というより，単語のランクを分類するめやすをしめした，というものである。古典や文学作品やラジオにあらわれる，ということ自体は，文字どおりには，使用分野を指示したものである。それは，たしかに，単語の硬度（文体的性質）を分類する基準になる。一定の硬度をもつ単語だから，これこれの分野でつかわれる，また，ぎゃくに，これこれの分野でつかわれるために，一定の硬度をもつようになる，という関係にある。しかし，原則的に，文体的性質と使用分野とは，区別しなければならない。

使用分野でも，文学作品やラジオなど，それ自体が一定の文体と関係しているもののばあいには，単語の硬度のめやすとして問題がすくない。しかし，内容的な分野については，硬度をしめすとはいえない。ここで＜上の3＞とされているものについては，はたして，ここに位置づけるべきかどうか，疑問がのこる。辞典のなかには，＜文章語＞といった文体上の水準と，＜生物学＞のような内容上の使用分野を，ともに「位相」とよんでいるものがおおい。そのばあい，これらのレッテルは排他的につかわれる。つまり，＜生物学＞というレッテルをはると，それ以上＜文章語＞というレッテルははらないのである。ところが，生物学用語のなかでも，あるものは，かなり日常的につかわれ，あるものは，きわめて文章語的だ，というような文体上の差はあるはずであって，使用分野の指示と文体の指示とは，重複してしめすのが，のぞましいありかたである。使用分野という観点からは，たんに学術論文というだけでなく，物理学の論文，生物学の論文，と専門に応じてかぎりなく細分することができるが，文体としては，学問分野ごとの水準を区別する理由はない。

『岩波中国語辞典』では，学術用語を細分しているのではなく，これを一括して全体のランクのなかに位置づけているのである。たしかに，学術用語は，総体としては＜上の3＞という位置をあたえられるような，文章語的なものだろう。しかし，純粋に文体的なランクという観点から，ひとつひとつをみていくと，はたして＜上の4＞と＜上の2＞の中間，といっ

ていいかどうか，疑問におもわれるものがある。学術語の文体的な位置づけがむずかしいのは，日本語についてもおなじで，専門家にはなんでもない単語が，一般人にはひどく高級におもわれる例がおおく，しかも専門家と一般人との区別が流動的であるために，どこに位置づけるべきか，まよう。このように，日中双方で問題があるので，ここでは，＜上の３＞に属するものは，対象外にした。

おなじような難点は，下のほうにもある。＜下の４＞（悪口）や＜下の５＞（方言からの借用）は，これらの単語の用法や起源で，直接には文体的ランクではない。しかし，ここでの考察は，大部分ランクが上のものに関係したことなので，さしあたっては問題がすくない。

編者が「これらの区分は，本来，きわめて困難であって，いずれのランクにおくべきか判断に迷うものも少なくなく，」とのべているように，個々の例については，疑問点を指摘できるものも，すくなくないだろう。それは，専門家による今後の検討にまかせることにして，ここでは，日中対照の１つの課題を提起するだけで満足せざるをえない。

3. 全体としての文体差

いったい，全部の語彙のなかで，特殊な文体的特徴をもつものは，どのくらいあるだろうか。以下に，おおざっぱな統計をとってみることにした。

『岩波中国語辞典』によると，中国語の文体的分布は，つぎのとおりである。ただし，100ページおきにかぞえた。

ページによって，かなりバラつきがあるが，これは，そのページに特定の要素をもつ単語がかたまっているためだろう。たとえば，300ページに＜上の２＞がおおいのは，「軍法，軍歌，軍紀」など「軍」ではじまる単語が，600ページに＜下の１＞がおおいのは，「小看，小可憐，小老姿」など「小」ではじまる単語が，それぞれ集中しているせいではないか，とおもわれる。

日本の国語辞典では，とくに目だつ単語にだけ，文体・位相上の注記をつける，という方式がふつうである。例外的に，すべての単語に注記をつ

ページ	100	200	300	400	500	600	700	計	(%)
上の5	—	2	2	1	—	2	—	7	1.6
上の4	—	3	6	1	4	—	1	15	3.5
上の3	—	5	7	4	5	1	—	22	5.2
上の2	2	9	37	8	9	5	3	73	17.2
上の1	1	9	20	7	20	13	4	74	17.4
0	14	22	16	21	26	22	16	137	32.2
下の1	6	11	3	18	8	19	6	71	16.7
下の2	—	2	1	1	—	—	3	7	1.6
下の3	3	1	1	2	4	1	—	12	2.8
下の4	—	2	—	2	—	3	—	7	1.6
下の5	—	—	—	—	—	—	—	—	0.0
計	26	66	93	65	76	66	33	425	

けているものに，大野晋・浜西正人『類語国語辞典』がある。この辞典の注記のうち，関係のあるものをぬきだすと，つぎのようなものがある。

（例）

常	日常語	学校
ロ	ロ語	尖〔とんが〕る
文	文語	濡[そぼ]つ
文章	文章語	学窓
雅	雅語	夕月夜
俗	俗語	ばてる
方	方言	がめつい

このほか，各分野の専門語であることをしめす「理（物理・化学）」「医（医学）」「生（生理学）」「軍（軍事）」などがある。これらは，ほかの文体的注記とかさなっていることもあり，また，文体的注記のかわりについていることもある。たとえば「牢」「留置場」は日常語，「拘置所」「監獄」は法律用語という注記があるだけだが，「刑務所」については，日常語であ

り，かつ法律用語である，という両方の注記がついている。このように，文体と使用分野と，両方を注記するのがのぞましいのだが，おおくの例では，その一方ですましているようである。以下の統計では，両方の注記があるばあいには文体的なものだけをとり，専門用語だけの注記については，分野のちがいを無視して，「専」とした。対象としたのは，中国語と同様，100ページおきである。（表の10，20，30……は，それぞれ100ページ，200ページ，300ページをあらわす。）

ページ	10	20	30	40	50	60	70	80	90	100	110	120	130	計	(%)
雅	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	—	—	—	1	0.2
文	—	1	—	—	—	—	2	1	—	1	4	—	—	9	1.5
専	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	3	—	3	10	1.7
文章	11	13	17	8	5	17	23	6	7	21	18	15	4	165	27.9
常	38	21	28	36	31	31	19	36	36	18	18	26	41	379	64.0
口	1	8	—	—	5	—	—	1	3	1	—	6	—	25	4.2
俗	—	—	—	—	—	—	—	1	—	1	—	—	—	2	0.3
方	—	1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	0.2
計	50	44	45	44	41	48	44	45	46	47	43	47	48	592	

具体例を900ページと1000ページからあげると，

	（900ページ）	（1000ページ）
雅：		学舎〔まなびや〕
文：		教えの庭
専：		検察庁，拘置所，監獄，営倉
文章：	軽軽，率然，浮薄，軽佻浮薄，妄り，悠悠閑閑，綽然	最高裁，高裁，地裁，家裁，簡裁，最高検，高検，地検，獄，獄舎，獄窓，鉄窓，監房，牢獄，牢舎，ラーゲル，学府，学窓，学舎〔がくしゃ〕，官学，義塾

常：　軽はずみ，軽率，軽薄，粗忽，無分別，心無い，無闇，滅多，他愛ない，後先構わず，手当たり次第，一も二も無く，衝動的，盲目的，気長，余裕，余裕綽綽，悠長，悠然，悠悠，ゆったり，ゆっくり，緩りと，緩緩〔ゆるゆる〕，落ち落ち，おっとり，のんびり，慌ただしい，忙〔いそが〕しい，忙〔せわ〕しい，忙〔せわ〕しない，気忙〔ぜわ〕しい，せかせか，こせこせ，せせこましい，齷齪　測候所，気象庁，天文台，保健所，刑務所，牢，牢屋，土牢，留置場，収容所，校，学校，学院，学園，スクール，私学，塾，私塾

口：　無闇矢鱈，滅多矢鱈，のほほんと　職安

俗：　豚箱

となる。これらは，一般の辞典では，ほとんど注記がない。比較的よく文体的注記をつけているのは，『新選国語辞典』（第6版，1987）であるが，それでも

文章語：率然，浮薄，軽佻（浮薄），悠悠閑閑，悠悠；学舎〔まなびや〕，鉄窓，学舎〔がくしゃ〕

俗語：　滅多矢鱈，のほほんと，豚箱

程度である。なお，『研究社新和英大辞典』（1974）では，

A（時代語）：土牢

L（文語）　：率然，浮薄，軽佻（浮薄）；獄，獄舎，獄窓，学府

S（俗語）　：滅多矢鱈，のほほんと

V（卑語）　：豚箱

となっている。要するに，大部分の単語は無色透明なものだ，というのが一般の辞典の記述である。これはよくない。いちいちの単語の文体・位相の認定には個人差もあり，当然不満がのこるだろうが，全体としては，『類語国語辞典』程度の分類が妥当な線だとおもう。ということは，日本語の辞典でこの程度の規模のものについては，約3分の2が日常語，3分の1が文章語で，ほかの文体のものは，ひじょうにすくない，ということである。

なお，文体の分布は，語彙の量によってかわる。基本語彙だったら，大部分が日常語のはずだし，辞典がおおきくなるにつれて，文章語の比率は，しだいにたかくなると予想される。大型の辞典なら，半分以上が文章語であっても，おかしくない。

これらにくらべて，『岩波中国語辞典』による中国語文体の分類は，かなりちがった分布になっている。日中両方の文体による分類を強引につきあわせると，

（日本語）		（中国語）	
雅語	0.2	上の5	1.6
文語	1.5	上の4	3.5
専門語	1.7	上の3	5.2
文章語	27.9	上の2,1	34.6
日常語	64.0	0	32.2
口語	4.2	下の1	16.7
俗語	0.3	下の2	1.6
隠語	0.0	下の3,4	4.4
方言	0.2	下の5	0.0

となる。度数のすくないところは無視して，日本語といちじるしくちがうのは，第1に上のレベルのものが中立のもの（ランク0）よりもおおいこと，第2に下のレベルのものがかなりあること，である。どちらも標本を

ぬきだしての統計ではあるが，全体をしらべても，それほどちがった結果にはならないだろう。日本語の文体の分布が，わたしには，ほぼ妥当におもわれることは，うえにのべたとおりだが，日中のこのような差は，言語自身にあるものか，それとも辞典における認定基準によるのかは，見当がつかない。

4. 文体差の実例

日中間で文体的ランクのちがう同形語がある，という指摘にさきだって，誤解をさけるために，大部分の同形語では，意味や文法的性質とともに，文体的性質も，むしろにている，ということをのべておきたい。中国語でｂではじまる単語のなかから，その例をあげよう。

〔ランク上の５〕比鄰・睥睨・波瀾・不朽

〔ランク上の４〕白髪・白面・白昼・彼此・筆法・不測

〔ランク上の２〕保持

〔ランク上の１〕報復・抱負・宝庫・包括

〔ランク０〕白米・芭蕉・半分・半熟・報告・宝石・八月・倍・便利・便所・標本・表面・別・病人・病院・不安・部分

これらは，日本語でかんがえても，やはり大体対応するような文体上の位置にあるものとみとめていい，とおもわれる。

以下に，日中で意味的にはちかいが，文体的にはズレのある同形語の例をあげる。品詞の分類と意味の注記は，『岩波中国語辞典』にしたがった。ただし，いくつもの品詞や意味の注記があるばあいには，適宜省略した。

Ⅰ．日常語（中）：文章語（日）

文体の差でおおいのは，中国語ではふつうの単語が，日本語では，より上のランクに属する，という型である。最初にあげた「学習」も，その例である。（中国語の）品詞別に，ながめていこう。

Ⅰ．1．名詞

〔ランク0のもの〕

根底・対内・対外・威風・力量・活路
麦秋・三伏・半夜・夜間・今年・従前・多年・年年
多方面・西方・路上・背後・門前・城外
数・大小・分毫・深浅・軽重・高低・多数・差
婦女・女人・女子・家人・夫妻・女婿・朋友・情人
貴賤・凡人・俘虜・閑人・兵・隊伍
村落・書舗・百貨店
悪夢・情緒・恩情・悪意・大声・心血・道理・一知半解
筆画・書（本）
福・好事・漫歩・歌舞・本分・大罪
贓物・衣裳・米飯・魚肉・厨房・鉄器・銅器・酒杯・七首
筆墨・白旗・港湾
光彩・白色・黒白・黒色・黄色・金色・深緑
粉末・泥土・糞土・河水・水滴・雨水
涼風・南風・順風・風波・風雨・晴天・青天・雨天
高地・高山・山地・山頂・清水・焦土
緑草・松樹・楊柳・梅花・綿花・樹皮
白馬・綿羊・羊群・杜鵑・蝸牛・蝴蝶・禿頭・頭髪・耳朶・大腿
長命・命（命令）・病（病気）・瘋癲

これらのおおくは，日本語でも，それほどランクのたかい単語ではないが，完全に無色透明な日常語ともいいにくい。なかには，「麦秋・三伏・半夜，羊群・蝸牛・蝴蝶」のように，日本語としては4または5をつけるべきものも，まじっている。おな，日本語では1字漢語は独立性がうすく，文章語的になる。「書，命，病」は，それぞれ「書物，命令，病気」の形にすれば，ランクがさがる。

〔ランク上の1のもの〕

関鍵・糸毫・景況・趨勢・奇・深更・長途・路程・満天
賓客・顧客・傷兵・殿軍・辺境

午睡・嘲笑・喊声・胆力・想念・短見・謬論・錯誤・疑心

遁辞・筆鋒・友誼

酒楼・車馬・唾壺・墳墓

純白・細雨・波浪・風光・鮮血・満身

これらは，中国語としても，やや上のランクとされているものだが，日本語としては，はなしことばにほとんどでてこない，高級な文体に属する。なお，ランク上の2は，文学作品を基準としているので，日本語でさらに上，とはいいにくく，ここではとりあげなかったが，なかには「蟋蟀（こおろぎ）」のように，日本語では，たんなる文学作品というより古典にしかでてこないものもある。これも同形語だ（＝現代日本語にある）というならば，日本語では最上級のランクである。

Ⅰ．2．動詞

〔ランク0のもの〕

抬頭・惹起・堅持・省力・到来・横行・落下

点灯・開門・打破・服（〔薬などを〕のむ）

煩悶・冷笑・辛苦・学習・回想・把握

服務・出奔・消閑・騎馬・下獄・産（生産する）

発光・服毒・横死・焼死・腐敗・吐血

これらは，日本語で「する」をつけて動詞にしたばあい，あきらかに文章語的である。「通過（する）・比較（する）・承認（する）」のように，かなりふつうにつかわれるものでも，「とおる・くらべる・みとめる」など，類義の和語とくらべれば，やはりランクは上である。

〔ランク上の1のもの〕

具有・遞増・腐爛・攪乱・攪拌・貫徹・流浪・来往・糾合・分岐

慟哭・刻苦・粉飾・鼓吹・痛飲・誹謗・欺瞞

これらは，日本語のサ変動詞としては，単に「ラジオ・テレビ・講演などで話されることば」というよりも高級な文体に属する。

Ⅰ．3．形容詞

〔ランク０のもの〕

経常・重複・過分・容易・長久・扁平・広大・過大・肥大・十全

聡明・悪辣・伶俐・沈着・柔和・周到・寛大

跋扈・不和・安寧・富裕・安穏・爽快・精細・浮華

模糊・乾燥・爛漫・蕭条

〔ランク上の１のもの〕

纒綿・稠密・無双・頽唐

刻薄・遅鈍・瀟洒・悠揚・懈怠・無聊・僥倖・富強・微賤

寂寞・漆黒

これらは，動詞とちがって，日本語のなかでの用法・品詞が一定していない。「聡明・悪辣・伶俐」のように，「だ（な・に）」をつけて，形容動詞になるのが一般的だが，「経常・漆黒」のように「の」をつけるもの，「蕭条・纒綿」のように「ーと（たる）」をつけるもの，「肥大・跋扈」のように「ーする（している）」をつけてつかうもの，「無聊・僥倖」のように名詞的なもの，と用法はさまざまである。ただ，意味的には，みな形容詞的（副詞的）だといってよい。「重複・容易」などは，日本語でもかなり日常語的だが，「かさなる・やさしい」にくらべれば，ランク０とはいえない。

Ⅰ．3．副詞

〔ランク０のもの〕

再三・再三再四・隔年・古来・万万・故意（わざと）

不可（……してはならない）

〔ランク上の１のもの〕

隔日（１日おきに）・後来（その後）

陸続（ぞろぞろと）・踊躍（おどりあがって）

毫（ちっとも）・必定（かならず）・畢竟（結局）

Ⅱ．文章語（中）：日常語（日）

うえにあげたのとちがって，中国語よりも日本語のなかでのランクがひ

くいものも，すこしはある。つぎにあげるのは，『岩波中国語辞典』でランク上の2，すなわち「文学作品などに現われることば」とされているものである。

〔名詞〕事件・全部・歴史・手術・発作・毎日

老人・世間・答案・棒・棍棒・残飯・牧場・半島

〔動詞〕沈没・登山・催促

これらは，日本語では，まったく無色の日常語というべきだろう。また，つぎのものは，ランク上の4，すなわち「古典のなかのことばではあるが，耳できくことばの中に混用されているもの」である。

〔名詞〕前者・凡例・定時・白昼・日没・戦後・半日・年号

王子・暴君・帝王・弟子・悪名・媒酌・容器・爆竹・白髪・下品

〔動詞〕上京・編纂

〔形容詞〕不足

〔副詞〕当日

つぎにあげるのは，ランク上の5，すなわち「古典のなかのことばが，たまたま耳できくことばの中に引用されて現われるもの」である。

〔名詞〕古今・海外・陛下・皇后・皇女・皇太子・皇子・皇帝・白骨

〔動詞〕即位

〔形容詞〕不利

〔副詞〕断乎

これら，中国語でランク4または5とされているものは，日本語で多少日常語より上の文章語的な位置をあたえるべきものもあるが，それにしても，「古典のなかの……」というほど，ランクが上だとはおもえない。

これらのうち，ややめだつのは，「皇帝・即位」など，帝王関係のことばで，これはすでに中国では過去のことだから，そのせいで日常語からとおざかった位置にあるのかもしれない。

Ⅲ．俗語（中）：日常語・文章語（日）

やはり中国語にくらべて日本語のランクが上にあるもののうち，中国語

で下という注記があたえられているものの例を，つぎにあげる。もともと，上のランクに分類されている単語の数はおおいが，下のランクのものはすくない。(これは，どの言語でもそうだろう。)そこで，ここにくるものも，あまりない。また，うえでみてきた，中国語で0または上のランクに属するもののばあいには，同形の日本語でも，それほど意味がかわらない例がおおいのにたいし，以下の例では，すこし意味がズレていることがおおい。

＜下の1　ややくだけた言いかた（いわゆる北京語)＞

〔名詞〕後尾（後の方)・年月（としつき)・月間（1カ月間)

　褒貶（非難)・名声（名声)・集会（集会)

　酒気（酔い)・光頭（坊主あたま)

〔動詞〕窮死（貧乏のために死ぬ)・伸展（のばす)・認識（知っている)

〔副詞〕連夜（徹夜で)

＜下の2　北京の下町ことば，スラングなど＞

〔名詞〕洋書（洋書)・醜業（泥水稼業)

＜下の4　他人にたいする悪口のことば＞

〔名詞〕独眼龍（めっかち)・利便（便利)

〔形容詞〕下賤（いやしい)

＜下の5　北京以外の方言から流入して，いちおうは北京でおこなわれていることば＞

〔動詞〕按摩（按摩をとる，マッサージをする)

「按摩」の例は，定義からいえば起源であって文体ではないから，ここであつかうべきかどうか，疑問である。

5.　ズレの原因など

以上のような文体のズレは，どこからきたのか。中国語では日常語で，対応する日本語のなかの同形語は文章語，という対立がおおいのは，漢文調の文章が，ながいあいだ日本の高級な文体とみとめられてきた，という歴史的な事情によるものであろう。しかし，それ以上，たちいった説明をすることは，むずかしい。文体的価値は，意味や文法的性質よりも，比較

的かんたんに変化する。古典にある高級な単語で一般にはつかわれなかったものが，ある事件のときに，たまたまマスコミがつかって流行語になり，それ以後日常語化した，というような例もありうる。だから，ある同形語の文体が日中でズレているとき，そのほんとうの原因は，ひとつひとつの単語ごとに，ちがっているはずで，それぞれについての研究が必要になる。わたしには，それをする力はまったくないが，文体のズレについて，やや一般化できることを２つ指摘しておこう。

第１は，日本語のほうが慣用句のなかでつかわれるものがあることである。たとえば，「竹馬の友」「よらば大樹のかげ」「頂門の１針」「～の双肩にかかっている」などの下線部分は，これらの慣用句のなか以外では，あまりつかわれない。しかし，中国語では，「竹馬」「大樹」は文字どおり「たけうま」「大木」を意味し，ほかの単語も，日本語よりは用法が自由なようである。用法が限定されることは，それだけ日常語からとおざかる可能性をたかめる。たとえば，「友」は同義語の「友だち」よりもかたい文体に属し，「よらば」は文語文法の用法であって，「竹馬の友だち」「よるなら大樹のかげ」とはいえないことは，「竹馬」「大樹」の文体的価値をたかい（ふるい）段階に固定するのに，役だっているはずである。以上はランク０の例だが，ランク上の２の単語のなかにも，「愁眉をひらく」「螳螂の斧」など，日本語では慣用句特有語になって，たかいランクに属する単語の例がある。

第２は，日本語が外来語を採用したものである。

〔ランク０〕乾酪（チーズ）・酒精（アルコール）
　高楼（ビルディング）・風琴（オルガン）
　碧玉（サファイア）・玻璃（ガラス）・金剛石（ダイアモンド）
　橄欖（オリーブ）・白楊（ポプラ）
〔ランク上の１〕提琴（ヴァイオリン）

これらは，日本では外来語でいうのがふつうで，漢語の訳は，ほとんどつかわれない。もし，つかうとすれば，かなりかたい感じがする。日本でも，かつては，漢語による訳をつかったことがあり，その後外来語にきり

かえたため，これらの漢語が日常語化しなかったのだろう。もし，外来語がはいらず，漢語の名まえがつかわれていたら，これらのしめす事物そのものは，ごく日常的なものだから，その名まえも，日常的なレベルにとどまったのではないだろうか。

ここでは，もっぱら意味のちかい同形語をとりあげた。しかし，実用上は，意味のちがう同形語も，問題になる。中国語の「清楚」は「はっきりしている」という意味で，「かざりけがなく，きよらかだ」という意味の日本語の「清楚」とは，まったくちがう。日本人が中国語をならうばあいでも，中国人が日本語をならうばあいでも，まず意味のちがいが問題なのは当然だが，一方で，中国語の「清楚」が，ごくあたりまえの日常語（ランク0）なのに，日本語の「清楚」は，かなり高級な文学的用語だ，というちがいをも，しらなければいけない。

また，ひろい意味での同形語にふくまれる，漢語と同表記の和語の文体も，学習者はおぼえる必要がある。日本語の「大声」「雨水」は，「おおごえ，あまみず」と和語でよんだときと，「たいせい，うすい」と漢語としてよんだときとで，まったく文体的性質がちがってしまうのだが，この区別が日本語にとって重要なことは，いうまでもない。

参考文献

浅野百合子（1981）：『語彙』（教師用日本語教育ハンドブック5），国際交流基金
荒屋　勧（1983）：「日中同形語」（大東文化大学紀要（人文）21）
大河内康憲（1986）：「日本語と中国語の同形語」（日本語と中国語対照研究会編『日本語と中国語の同形語(1)』）
高　偉建（1989）：「日中同形語の対照研究」（大阪大学日本学報8）
島本　基（1990）：「語の位相」（講座日本語と日本語教育7　玉村文郎編『日本語の語彙・意味（下）』）

（本学文学部教授）